

選手とスポーツをとりまく環境 （世界陸上選手権の出場から）

筑波大学大学院人間総合科学
学研究所講師・JOCアス
リート委員

谷川 聡
（たにがわ さとる）

この夏、フィンランドでおこなわれたヘルシンキ世界陸上選手権は私自身5度目の世界大会出場（種目・百十メートルハードル）となったが、企業選手としてプロフェッショナル競技者でなくなった私にとっては初めての出場になった。本年度から大学院の教員として、またJOCのアスリート委員としてこれまでと異なった立場での大会参加だったため、今回はプレイするだけでなく選手とスポーツをとりまく環境について考えさせられた。

オリンピック、ワールドカップに次ぐ世界3番目のビックイベントである世界陸上は、スポーツの商業化、イベントの巨大化、ドーピング問題などマスメディアがさまざまな

問題を扱うのに格好のメディア媒体になっている。

スポンサー企業国のテレビの放映時間の影響で競技時間が不適切なタイムテーブルになっていること、過度のメディア報道によるスポーツ自体のイメージの歪曲が行われていることが今回も感じられた。また、オリンピックなどのビックスポーツイベント同様に世界陸上もユーロセントリックなもの

であり、競技ルールの変更や開催地決定などますます選手への配慮などなくなってきたしまっている。

しかし、2007年は大阪での開催となることから、私もさまざまな形で選手が主役であることをアピールできる大会にしなくてはならないと思っている。そのときに選手であるかはわからないのだが……。

また、スポーツを取り扱うメディアによってスポーツがスポーツの領域にとどまることなく社会的に、国際的にさらには科学的に取り上げら



れるようになってきた。選手はその中でこれまで以上にさまざまな場面で行動や発言の場が増えてきており、近年のスポーツ選手の低年齢化およびスポーツへ特化した教育を見直していくべきだと感じる。JOCアスリート委員会で私も提案した「トッパスリートのメディア対応教育」は今後の課題であろう。

さらに、選手強化としてスポーツ振興法に基づきJOCは01年に10年間のゴールドプランを実施した。しかし、人種的には日本人の身体能力はかなり低いものであり、多くのス

ポーツ種目に必要とされるパワー・スピード系能力の高い西アフリカをルーツとした人種と戦うには、身体的能力差を埋め、日本人独自の技術論などどのように対抗するか求められている。そのために、現代の日本産業社会において、異業種の合併吸収もしくは融合が盛んに行われているように、旧態依然とした

日本スポーツ界の種目別の縦割り体制を完全に見直し、競技間の垣根をこえた連携、情報交換といったマネジメントが必要とされている。したがって、今後とも実業界で活躍する人々からアイデアが求められる。

また、選手としては、クラブチームの一員として更なる競技力向上を目指している。「企業による選手の保有から支援へ」という新しいコンセプトにより、競技環境の整備だけでなく競技の普及活動が主になっているクラブであるが、今後は競技の枠を超えた普及活動や、地域密着という形のクラブチームとの連携もとっていきたいと考えている。

このように、世界大会に選手として出場を重ねるほど、日本のスポーツ界が進化していかなくてはならない現実と日本社会におけるスポーツの必要性を感じ、私も微力ながら大学院の教員、研究者、JOC委員、クラブ選手というさまざまな立場を通して、スポーツを日本社会のエネルギーとなるようなものになりたい。これからもぜひ様々な人々から知恵をかしていただきたいと考えている。

（96年経済学部卒業）

グローバル化の時代を幸せに生きるには

公認会計士協会会長

藤沼 亜起
ふじぬまつくおき

私は、国際会計士連盟などの国際的組織での活動が長く、日本のみならず海外の友人も多いことから、人は人種、国籍、言語そして宗教などの違いがあっても皆同じと実感しております。そこで幸せな人生を築くための内外共通の原則はないかと考えてみました。三つの原則があると思います。

第一は、人間としてのバックボーンとなるもの、倫理感、別の言葉で言えば行動指針についてです。

二番目は、どのように人間関係を築くか、つまり多くの人に良き理解者や支持者になってもらうことについてです。

三番目は、現状と環境の変化を素早く認識しそれらに対応するための

準備をすることについてです。

第一の、人間としての行動指針については、英語で言えば Integrity だと思っています。つまり人間としての誠実性や高潔性を言います。

外国人に言わせるとこの Integrity は相当に深い意味があり、単に人が良いという意味ではなく、哲学や深い知識そして精神的な独立性によって裏付けられた「人間としての誠実性」です。この原則がしっかりと

いる人は、軸がぶれることはなく安心していることができます。

第二は人間関係の原則です。私は、英語で言えば三つ

の F、つまり、Friendly、Frank、そして Fair が大切であると思っています。

まずは Friendly です。つまり「親しい」とか「友好的な」という意味で、友達のような優しい気持ちで、まず相手に接することが大事だと思います。日本人はなかなか自分の気持ちを率直に表すことができない人

がいますが、この Friendly な気持ちを持つてさえいればいつかは相手に伝わるものです。

その次は Frank ということです。つまり「率直な」という意味です。親しくなった後に相手との関係をさらに前進させる必要がありますが、それには自分の気持ちや考え方を率直に言うことが大事です。また相手の意見を謙虚に聞いてあげることも

必要です。これら両者の関係はより親しい関係へと進んでいくと思えます。

続いて Fair です。これは「公平な」とか「公正な」という意味で、そ

の人の判断や態度が公平で、人々の Respect を受ける、尊敬される、つまり一置かれるような存在になることです。

今も人間関係に悩んでいる人がいると思いますが、相手のことについていろいろ悩むより、まず自分自身が Friendly で次に Frank な関係を築く、そして常に Fair な判断ができる

ように努力してほしいと思います。

三番目の原則は、社会の変化や環境変化に対する準備や対応についてです。今後のグローバル化や情報社会の発展のスピードは、早く急速なものだと思えます。現在は立派な会社であっても、10年後にその会社が存続しているかどうかは誰にもわかりません。

変化に対応するために現状を冷静に分析し、経済や社会環境の変化を予測し、対応策を準備しそれを実行していくことは、自分自身の問題であり、大げさに言えば、家族のためのサバイバル作戦でもあるのです。

それには縦軸としての専門分野のみならず、横軸としていろいろな分野への関心を高め、弛まぬ勉学の努力が必要で、つまり私は、社会に出てからの学習で目指すことは「T型人間」になることではないかと思っています。

この誌面を通して、私が普段考えていることを後輩の皆様に伝えることができ、大変喜んでおります。

68年商学部卒業 国際会計士連盟 (IFAC) 会長をへて04年から現職



編集者の辛さと面白さ

オピニオン誌『表現者』

編集委員代表

関東学院大学教授

富岡幸一郎

とみおかこういちろう

が、発行所を引き受けてくれるとの話がまいこんできた。

そこで後継誌として隔月で『表現者』という雑誌を出すことになり、

私が編集委員の代表をつとめることになった。文芸評論家の高澤秀次氏、経済ジャーナリストの東谷暁氏と私の三人が編集の企画などを立て、西

部邁氏と京大教授の佐伯啓思氏に編

集顧問をお願いし

て、この六月に創刊号を出すことができた。

編集委員といつても、実務はこれ

まで通り西部邁事務所の若い優秀なスタッフに全てまかせ、発売はイブシロン出版企画にやつてもらっているので安心である。『発言者』のこれまでの執筆軸に加えて、新たに多くの書き手に参加してもらい、毎号創作を一本（十五枚程の掌編小説）を入れることとした。

私自身もむろん執筆するのであるが、今度は編集者として、人に原稿を依頼し、入稿を待つという体験

をした。これは楽しいと同時に、なかなか大変なことであるとはじめて分った。つまり、締め切りをすぎても、原稿が入らないということがあらからだ。書き手として、これまで締め

切りを過ぎて入稿

したことはしばし

ばあった（この原

稿も実はそうだ）。

しかし落したことは

ほとんどない。

まあ、平気だろう

と思っていたが、

待つ身になって、そのしんどさが身にしみた。電話やメールを入れるが不在で、応答がない。胃が痛くなる。しかし酒は飲みたくなる……。待た

せる身もつらいが、待つ身もつらい

ことを味わい、しかし無事創刊号を

送り出すことができた。

二号（八月十六日刊）では、『国

家の罨』で話題の佐藤優氏に鼎談に登場していただいた。

外務省でロシアとの交渉にあたった佐藤氏は、同志社大学の神学部を出て、チェコの神学者フロマートクの研究者でもある。以前にカール・バルトについて評論（『使徒的人間——カール・バルト』）を著わした

私は、佐藤氏としばし神学談義を楽

しんだ。日本の政治や外交は、長期

的な視野による戦略を欠いているが、

それは外交官が哲学や神学を基盤に

した理念的な思考ができないからで

はないだろうか。そういうなかで佐

藤氏は全く例外的であり、今後は評

論家としても健筆をふるわれるだろ

う。雑誌の編集をやる面白さは、こ

ういう傑出した人物に出会えること

でもある。

◇

『表現者』に興味ある方は、イブシロン出版企画、電話03・5368・2327へご連絡下さい。

（83年文学部卒業）

「10秒前、8、7、6……」 TVディレクターのゼロポイント

NHK新潟放送局ディレクター

小林 欧子

「番組開始、1分前です!」。時計の秒針より遙かに速く、心臓が脈打つ。「30秒前」「10秒前、8、7、6、5秒前……入った!」

私の仕事は、番組の制作。いわゆるディレクターというヤツである。地方ローカルの約50分間の生番組、それが私の初仕事だ。

本番組1週間は、準備のため、毎日帰りが午前様だった。何もわかっていない状況でも、番組の構成から現場の指示までやらなければならぬ。気持ちばかりが焦る。本番組は刻一刻と迫ってくる。初めての取材相手である番組ゲストは、テレビ初登

場、かつ私より年下にもかかわらず、混乱する私よりずっと落ち着いていて、逆に心配してもらってしまいう始末である。

そして気づくと、もう1分前。初めて打つカウントに、すでに動揺が隠せない。しかし、番組は当たり前のように始まった。「あ、スーパールのタイミングが! あ、これさっき出したスーパード!」

テレビによくあるスーパールの間違いは、こうやって生じているんだなあ、なんて、あせる頭の中でおぼろ

に思ったりした。50分は怒涛のように過ぎ、初仕事は終わった。しかし、その終わりこそが、これから続く長い道のりの始まりなんだろうなあ、とまた緊張したままの頭で考える。仕事を始めて3カ月。もう、20人以上の人に出会っている。祭りに情熱を傾けるおじさんたち、震災の影響に苦しむ農村の人々、ジャズ



ダンスに青春をかける佐渡の学生たち。それぞれの人が全く違う考えや全く違った人生を生きている。それを発掘し、切り取っていくのが私の仕事である。一つ一つの出会いが、私を成長させる糧になっていく。

今ぶち当たっている壁は、仕事の責任を負いきれないこと。番組の担当ディレクターになると、1から10まで100

まで、全て自分の責任になる。しかし、誰かのせいにしたくなるし、言い訳もしたくなる。今までいかに、人に寄りかかって

甘えながら生きてきたのかということとを思い知る毎日だ。社会に出るに当たったの研修で、「学生と社会人との違いは何か」というような話必ず出るだろう。「責任」——研修当時の私はそう答えたけれど、その責任の重さは背負ってみたいとわからないものだ。

人生をかけられる仕事がしたい。

大学4年間で辿りついた答え。探検部に所属し、山に分け入り、滝によじ登り、洞窟にもぐり、川に流されてきた日々。面白いことへの衝動に駆られ、ただがむしゃらに走り続けた。しかし少しずつ、これは学生の遊びじゃないかと思いついた。遊びじゃなく、刺激を求められるような誰かの人生に影響を与えられるような、そんな生き方をしたいと思った。気づくのが遅すぎて、就職せずに卒業するというひどい親不孝までしてしまつたが、やりたいことをめいっぱいに出るといふ環境は、学生時代にしかありえないこと。

社会人としての私はまだスタートを切つたばかりだが、今の私につながるゼロポイントは大学時代にある。就職前の明るく輝かしい現実とは、あまりにかけ離れた厳しい現実、今はおぼれないようにもがいているばかりだが、ゼロポイントで見つけた答えを胸に、今日も新しい出会いを求めて、取材に駆け出していると思う。

(05年法学部政治学科卒)